



風雪有情

野原 一登

「街づくりといったものは、数字の積上げから出てくるものと私は考えていない。もっと芸術的な、文学的なものだと思はれている。だから限られた財源の中で、その制約の中でのみ政策を考えるのではなく、街を長生きさせるにはどうするか、市民が安全長生きのためにどうしたら良いかを考え、その考えを実現するために、財源をつくり出すために、頭腦の限りをしぼって財源を生み出す。」

このような文章で始まる本があります。『風雪有情』です。三六年前の昭和四九年に発刊された、第五代帯広市長・吉村博氏の街づくり一八年の歩みが書かれた本

なのです。

私の同級生に吉村さんの娘さんがおられ、吉村さんの様々な情報が私の心を動かし始めました。学生時代から、何としてもこの市長に仕えてみたいという思いが強くなり、昭和三八年、帯広市役所に就職したのが吉村のオヤジさんとの出会いでした。

なぜ、こんなにオヤジさんのことが恋人のように好きなんだろう。「オヤジ」などという、大変生意気なことと思われるかも知れません。吉村さんは文人でもあり、俳号は「冬」とか「弥三（親分）」と呼ばれ、懐深く、心優しい親分肌で、私のオヤジでもあり、市民のオヤジでもある人だと理解してください。オヤジさ

んの話、帯広の街づくりの話になると、ボルテージは上がりつ放しになり、熱く語ってしまいます。人間吉村博を語ると、時を忘れます。

オヤジさんは、昭和三〇年に四四歳で帯広市長になり、一八年間、帯広の街づくりの礎をつくりました。私がオヤジさんを尊敬し、政治・地方自治の師として仰ぐのは、市長だからではなく、ヒューマンとロマンの理想を掲げ、力の限り帯広を愛することに、その生涯を捧げた人物だったからなのです。人を愛し、創造する夢を持ち、水と空気が美味しい街をつくり、子どもとお年寄りを大切にし、住みやすい帯広を創った人なのです。

また、総合計画をいち早く策定し、常に百年先の街の方向・あり様を見据える力が自然と出てくる「近代的田園都市構想」をつくり上げた類稀な人物でもあり、これらの理想を実現するから凄い。緑の森をつくり次代に残すと、議会で一票差で「帯広の森構想」を通し、今では帯広市街を緑の森で囲むと言ったことが、着実に成長し続けています。

オヤジさんは、良い都市とは必ずしも人口が多ければよいものでなく、市民からみて住みやすい、働き易い都市であるか、子どもを育てる場所としてはどうか、



など総合して評価されるべきもので、二〇万人くらいが首長として責任を持てる範囲だという人口限界論を持ち、為政者はどうあるべきかについて次のように記しています。

「為政者は、ここで短い時間に整備を急ぐ問題と、遠い年数をかけて整備をはかる問題をしっかりと見定めなければならぬ。

多くの市民は、長期計画や展望よりは即効的な足元の問題をせまるものであるが、市民大衆の声に耳をふさいでではないし、その方に組ることが行政効果をあげられるだろう。しかし、市民要求の圧力に耐えかねて都市の非常に大事な展望や百年の計を絶対見失ってはならない。為政者にとって最大の失政ありとす

れば、この辺の問題ではないだろうか。だから、この一点は信念の一徹の腹の決めどころとなるだろう。ほんとの為政者と、にせの為政者の勝負の岐れ目ともいえる。」

このように明確に言い放つ腹が据わったオヤジさんの豪快さときめ細やかさ、そして信念が見えてくるのです。

この本の題名である「風雪有情」は、この地、十勝、帯広の厳しい自然の中に、ともに街づくりに関わる首長と市民、その心の様を写し出すことばだと思います。

「私たちの街は、日本中で一番寒いところだといわれている。日高山脈からの風のきびしく、それに雪がともなえば、いつそうきびしいものとなる。こうした自然現象は、市民の気持ちにも大きな影響を与えずにはおかない。しかし、その雪にも風にもすぐやってくるであろう春をつげる、何ものかが内在している。そういう肌をうつ吹雪に通う情愛、これは長く北国に育ったものにしかわからない情感だろうか。きびしさのなかにある、ある種の「甘さ」、私は雪や風やらにそれを感じる。(中略)

つまり、よくいわれる「茨の道」であ

るが、それを、人生における風雪と考えるれば、どんな苛酷な道でも、道は開けるのである。厳冬の冬は、「暖い春への道程」である。すぐそこに春が微笑んでいるのだ。そういう気持ちを持ちながら、生き抜いていくことが、いかに大切なことか。」

この四文字「風雪有情」に込められた思いを感じ、目を閉じると、吉村のオヤジさんの話や、私を息子のように接してくれたことなど、様々な情景が浮かんできます。いまから九九年前に、こんなオヤジさんが生まれていたことに誇りを感じます。

オヤジさんが首長になったときから、地方自治とか主権とかの原点が語られ実行されていたことに、吉村のオヤジの凄さをあらためて感じるとともに、自治・主権・分権は、新しいことへの挑戦ではなく、当たり前のことを行うことだと思います。政権交代は、地方自治体が目覚ます切っ掛けとなればうれしいですね。自分の置かれている位置を見失わないこと、「風雪有情」が私の政治の柱になっていることに、いま気が付いています。

△のほら いっと・帯広市議会議員▽